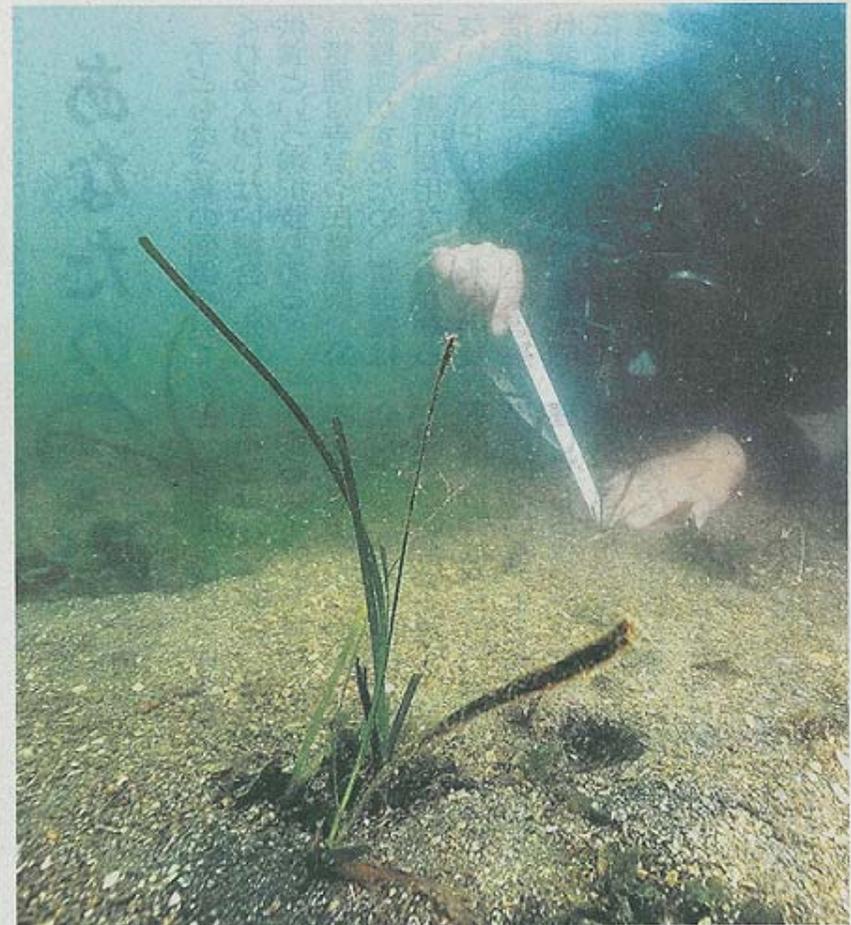


「海のゆりかご」危機

泉南のアマモ

魚たちの産卵場やすみかとなり、「海のゆりかご」といわれる海草のアマモが、この夏の高水温で大打撃を受けている。府南部の泉南地区では、砂地を覆っていた群落が葉を落とし、激減した場所もある。

(小林裕幸)



① 激減したアマモ＝今年10月、小林裕幸撮影
 ② 密生しているアマモ＝昨年9月、岩井克巳さん提供、いずれも泉南市のタルイサザンビーチ

夏の高水温で落葉

アマモの保護活動などを続けるNPO「環境教育技術振興会」(松原市)の調査によると、貝塚市の二色の浜にあるアマモ自生地では、昨年10月に1平方メートルあたり約200株あったのが今年は半減し、葉の長さも半分以下になっていた。また、泉南市のタルイサザンビーチでは昨年、100平方メートルに移植したアマモ約750株が根付いていたが、今年は26株しか見つからなかった。

府環境農林水産総合研究所によると、研究所の水産技術センターがある岬町沖の水温は、今年8月と9月の平均で26.7度と例年より1.2度も高かった。アマモが生息する浅場はさらに高温になっていたと考えられる。アマモは水温が高くなる初夏から秋にかけて衰退して短くなるが、今年は極端な高水温で、すっかり葉を落とした可能性があるという。

調査した同会の岩井克巳理事は「これほどぐっさりやられていとは思わなかった。生息する魚やイカ、他の海草への影響も含め、慎重に見守りたい」と話している。

